

3 夢ある建築家への磨き

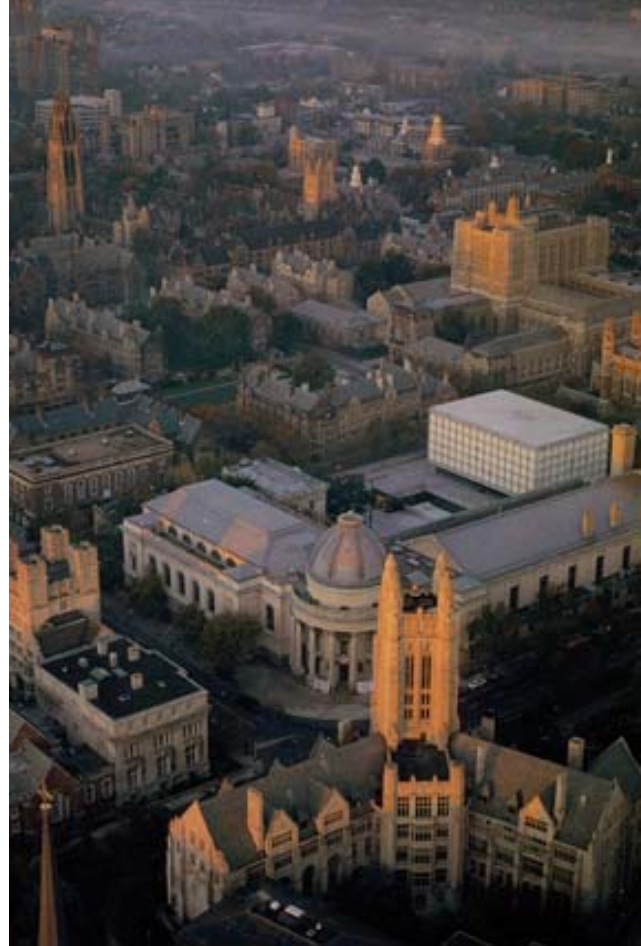
3.1 イェール大学大学院、建築学部

1974年9月、とても入れると思ってもいなかった名門のアイビーリーグの大学の大学院に入学出来たのである。伝統的にイェール大学に入学出来る学生は、金持ちか有名な家系の子供、あるいは秀才の学生かである。私はそれらの何にも属していないのである。私が持っているものがあるとしたら、意志と努力と行動力だけであろうか。日本で、小さい頃から学歴と学閥に苦しんできた私が、その差別を克服する為にここまで来たかと思うと、自分自身の執念に驚く。しかし、私は学歴や学閥を得ようとして、この名門の大学院に入ったのではない。

私が学ぼうとする現代建築のカリキュラムがこの大学にあり、そして世界の建築学部だと思ったから、この大学を選んだのである。その年の建築学部の大学院の入学の倍率は20倍近くあったと後で聞いた。アメリカでは不可能なことを可能にしてくれるというのが、このことかと思った。誰かが私の意志と努力と行動を見ていてくれた気がする。これも神が与えてくれた道なのだと思うことにした。

イェール大学のキャンパスは、コネチカット州の古い小さな街、ニューヘブンの中心地にあり、キャンパスと街とが一体となっている。そして、古いイギリスのゴシック風の建物が建ち並ぶキャンパスの中には、有名な建築家達によって設計された現代建築も沢山建てられている。キャンパスを歩くだけで建築のスピリットが感じられる。建築学部の建物は、1960年代の学部長であったポール、ルドルフによって設計されたものである。

イェール大学、大学院建築学部、私はここで建築を2年間学んだ。



アイビーリーグ、イェール大学のセンターキャンパス



学部長ルドルフの研究室だったペントハウスを学生と学院生のコーヒーショップとして開放された。キャンパスが一望出来、我々の憩いの場となった。



建築家、スターリングやムアー交えての建築学部のパーティー、フリーデスカッションの時も大学当局がビールやワインは供給してくれた。

ブルータリズムの荒々しいコンクリートの建物で、超現代建築の先端をいく建物として、世界の建築界で注目をあびていた。しかし、使いにくいとか、エアコンが十分でないとかの理由で、学生達はこの建築物に対して不満を持っていた。

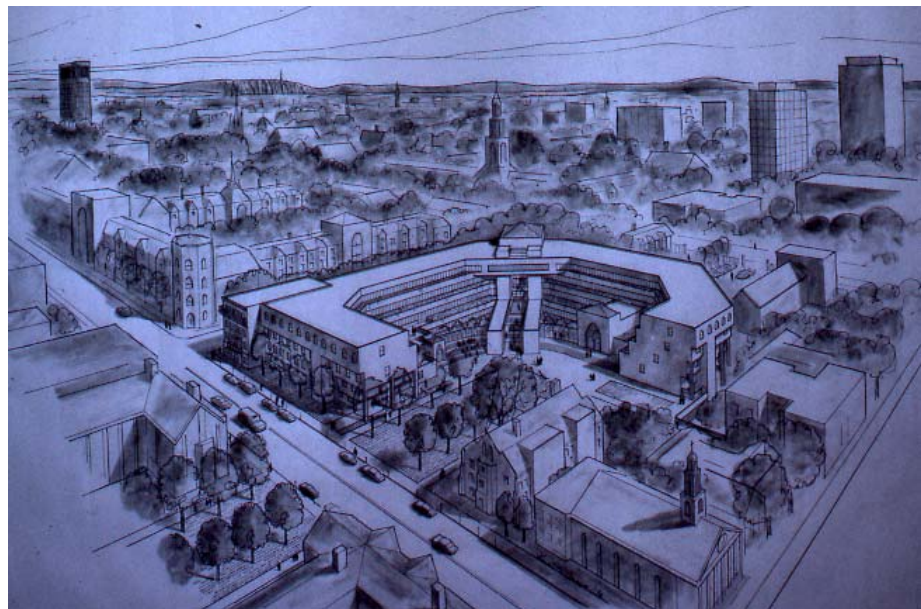
ある時、火事になった。リベラルな学生が、この建物と大学の方針に不満をもって、火をつけたという噂だった。アメリカの多くの大学で大学闘争が起きていた時代であった。又、アスベスト等の問題もあって、この建物は何度も改造されている。私たちはその耐火用として荒々しくアスベストが吹き付けてある図書館のむきだしの天井の下で勉強をした。その翌年イエール大学の医学部がアスベストの空間に長いこといると癌になる可能性が高いと発表した。そしてすぐ大学当局はそのアスベスト撤去に踏み切った。これがアメリカで始めて、いや世界で始めてアスベストの撤去をした出来事だったと思う。皮肉のことにポール・ルドルフは1990年代の後半に肺癌で亡くなっている。

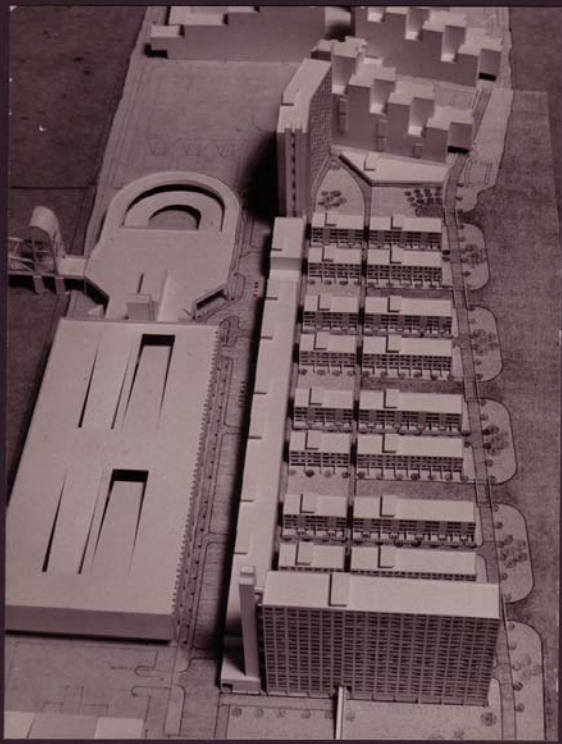
その他にルイス・カーン、チャールズ・ムアー、シーザー・ペリー、ロバート・スターン等の有名な建築家が学部長となり、この建築学部は、現代建築のスピリットの発祥の地のひとつの様になっている。イエール大学の大学院では、アメリカのみならず世界各国から選ばれた多くの学生達が学んでいた。大学院でのカリキュラムは建築の専門科目が主で、大半のコースは設計製図だった。日本とアメリカとで働いてきた私には、学ぼうとする「もの」が、深く、はっきりと見える気がした。その内容が充実しており、私が最も楽しかったコースは、世界一流の建築家達によるデザインスタジオとよばれる設計製図のコースであった。私は、彼等が建築についてどのように考え、語り、そして設計していくかを興味深く観察した。

最初の私のデザインスタジオは、イギリスの著名な建築家ジェームス・スターリングのコースであった。そのデザインスタジオは15人程の学生とスターリングと、そして経験も豊富な建築家のアシスタントで

イエール大学ミュージックスクール新校舎設計の課題（私の作品）
ジェームススターリングのデザインスタジオ

はヒッチコックを思わせる様な巨体で、いつも同じブルーのシャツにネクタイをしめて、彼自身のイメージを作り出していた。彼の授業は、学生に教えると同時に自分も共に学ぼうという気迫の感じられるものだった。大きな体をしているのに、いつも小さなスケッチを描いていた。彼の講義は、建築





Roosevelt Island Housing — R. Meier Studio '77

についての概念的な講義が多かった。

彼が学生を連れて有名な建物を視察に行った時、私は建物を直接視察する代わりに、彼自身の行動を観察していた。彼はマスタープランの建築の「軸」となるものを大事に見ていた。彼が小さくスケッチで描いてゆくことにより、建築全体が見えてきて全体の構想が浮かびあがってくるのであろう。私は彼を観察することで、彼の設計手法がだんだんとわかってきた。彼はイギリスからの短期間の単身赴任だったので、時々、私のアパートに彼を招いてスキヤキパーティー等をした。

後期に私がとったデザインスタジオはリチャードマイヤーのコースであった。このスタジオも同じ様に、12～13人の学生と、リチャード・マイヤーをサポートするニューヘブレンでは名の通った建築家ハワード・ロスとでなりたっていた。この当時、リチャード・マイヤーはまだ若く、ニューヨークからベンツのスポーツカーに乗

ルーズベルトアイランドの集合住宅の課題（私の作品）

リチャード・マイヤーのスタジオ

って、いつも違うスーツをカッコよく着こなして、長いマフラーを首に巻いて大学にやっ

てきていた。そのデザインスタジオは、集合住宅のコースであった。ニューヨーク市マンハッタンのイースト・リバーに浮かぶ小さな島、ルーズベルト・アイランドに建設する集合住宅の設計だった。

この集合住宅の設計の合間に一週間の短期間で巨匠建築家、ル・コルビュジェの住宅の空間分析の課題があった。各学生が好きなル・コルビュジェの住宅を選び、それらの住宅の完璧な図面を描き、そして空間分析し、ディスカッションするのである。私はサボオイエ邸を選んだ。日本の大学でも同じ様に恩師船越先生の授業でフランク・ロイド・ライトの落水荘の住宅の空間分析をしたことを思い出した。リチャード・マイヤーはル・コルビュジェの建物のすべてを完璧に知りつくしているように思われた。サボオイエ邸のピロティーとなっている柱は、ドミノシステムという工法で、壁を構造から切り離している論理を強調している作品であるが、私は、“一階のベッドルームの部分は柱を取り除き壁で上部の床をささえているので、これはこのドミノシステムに反しているのではない

コルビュジェの亡霊がついているかと思わせる イエール大学建築学部の壁の詳細。人体黄金尺。





**いつも散乱しているイエール大学建築学
部のドラフティングルーム。
建築学生の溜まり場となっている。**

か”と、リチャード・マイヤーに問うと、“そうではない、これらはよく計画されて考えてつくられているバランスのとれた空間なのだ。出来るならば実際にこの住宅を見に行ったら良い、良く解るはずだ。”と言われた。集合住宅のプロジェクトでは、彼

と私の間で議論になったことは、所得階層別による設計の是非についてであった。私は、上、中、下の所得階層、それに老人ホームを、別々の棟に分けて設計することを主張した。私は、集合住宅であるので居住者を明確にすることによって、開発しやすくなると主張したのである。“所得によって人を差別したくはないが、そうしないと高価の住居も高く売れずビジネスがなりたたないだろうし、それがアメリカの社会の現実のような気がする。”と私は言った。彼は言った。“所得で大人を分けても良いが、子供達を差別する様なことはしてはいけない。又、老人と子供を分けてしまうことにより、社会構成にも大きなひずみが出てきてしまう。1年中気候のいい、フロリダのジャクソンビルの街には、アメリカ北部から来たリタイヤーの人達が集まって、老人ホームと墓地だけの街になってしまった。クニオ、若い建築家に良い建築を見る旅行をすることを進めるが、それと同時に、その社会も見ろ！”と言われた。彼は、私のドラフティングテーブルの横に座り、私の図面の上にトレーシングペーパーを重ねて何度も何度も集合住宅のプランのスケッチを描いてくれた。

リチャード・マイヤーとは、彼の名作の一つであるスミス邸の住宅や、ニューヨーク郊外に建っている他の作品を、彼と一緒に視察してまわることが出来た。1.5mもある様な長いサブマリンと呼ばれるサンドイッチを彼のベンツのスポーツカーにのせて、スミス邸までやってきた。学生達とその長いサンドイッチをスライスして一緒にランチをしたり、又、近くにあるフィリップ・ジョンソンのガラスの住宅も一緒に見学した。楽しい充実した時であった。ある時、あれは1975年の春休みの時だった。私の古いフォードの車でニューヘブンからニューヨークへ行き、マンハッタンを友人とドライブしている時、偶然にも街中でリチャード・マイヤーが歩いているのを見つけた。黒いオーバーコートを着、長いマフラーをなびかせ、さっそうとカッコよく歩いていた。本当に偶然であった。声をかけると、“なかなかタクシーがつかまらないんだ、私の57丁目の事務所まで乗せていってくれないか？”と言われた。喜んで私は彼を乗せてあげた。雑談をしながらのほんの10分位だった。その夏、その時一緒にいた私の友人のジャスティンは無報酬で、高い電車賃を払って、ニューヘブンからニューヨークへ通って、リチャード・マイヤーの事務所で働いたのであった。私もそうしたが私には経済的に許されなかった。

**リチャードマイヤーの名作、スミス邸で彼と一緒に
サンドイッチを食べた。写真を撮るのにベスト地点を
教えてくれた。若き日のマイヤーとロス。**

